

令和 6 年 9 月 9 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00143

研究課題名（和文）美学の古典賦活のためのモデル構築

研究課題名（英文）Modeling to Revitalize the Classics in Aesthetics

研究代表者

小田部 胤久 (Otabe, Tanehisa)

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：80211142

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：人文系の学問にとって古典の重要性はあらゆる研究者が指摘するところであるが、古典を現代に賦活する方途に関しては、必ずしも一般的な了解が成り立っているとはいえない。従来の訓詁註釈型の研究は古典の理解にとって不可欠の前提をなすとはいえ、古典を現代に接続するには不十分である。本研究は、美学の古典中の古典である『判断力批判』を人と角例として取り上げて、それを単に2世紀前の歴史的書物として扱うのではなく、現代の美学理論を積極的に構成するものとして捉える方途を探り、古典賦活のためのモデルを構築する試みを行い、その成果を『美学』（東京大学出版会）として公刊した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『判断力批判』を一つの例に採り、（a）カントの『判断力批判』から単に命題を拾い出すのではなく、むしろそこから美学的主題を拾い上げ、それらを論理的に再構成しつつ、（b）さらに一方で歴史を遡りカントの議論を古代ギリシア以来の美学史の内に位置づけ、（c）他方でまた同時に、カントの議論がその後の美学理論に及ぼした影響や、カントの議論の持つ（あるいは持ちうる）理論的射程について触れる、そうした三重の課題を果たす研究を行った。このことをとおして、私は古典一般を賦活すると同時に、古典を通して現代の美学理論を賦活するためのモデルを構築したと考える。

研究成果の概要（英文）：The importance of classics in the humanities is widely acknowledged by scholars. However, there is not a common understanding of how to revitalize classics for contemporary relevance. Traditional exegetical studies provide an indispensable foundation for understanding classics, but they are insufficient for connecting them to the present day. This study explores avenues for bridging classics to the contemporary context by using Immanuel Kant's "Critique of the Power of Judgment," a classic in aesthetics, as a case study. Rather than treating it merely as a historical text from two centuries ago, this study aims to actively integrate it into contemporary aesthetics theory. It attempts to construct a model for revitalizing classics and has been published in "Aesthetics" (The University of Tokyo Press).

研究分野：美学

キーワード：古典賦活 『判断力批判』 美学理論

1. 研究開始当初の背景

人文系の学問において、最良の入門書とは、平易に書かれた解説書などではなく、その学問の古典である、といわれるが、私もそのように考える。平易に書かれた解説書は、私たちを一瞬わかかった気にしてくれるが、もう一歩進んで考えようとする、そのための足がかりを何も与えてくれないことがしばしばである。これに対して古典的な書物は、たしかに全貌がとらえにくく、私たちの理解を拒む箇所を含むとはいえ、味読するならばその後の思索へのたしかな足がかりを私たちに残してくれる。

美学にとってカント(1724-1804年)の『判断力批判』(1790年)(とりわけその第一部「美的判断力批判」)こそ古典の名に値する書物である。しかし、この書物が今日の美学理論において活かされているか、といえば、大いに疑問である。二つ例を挙げよう。「美の無関心性説」は今でもしばしばカント理論の中核として取り上げられることが多いが、ほとんどの場合それは「美的態度説」(ある種の態度をとると対象は美しく現象する、という立場で、通常はカントに続くショーペンハウアーに帰されるが、カントならびにショーペンハウアーの美学理論を「美的無関心性」によって捉えることは、後に見るように、実際には誤りである)とのかかわりにおいてであり、特に1970年代に芸術の制度説が広まるにつれ、「美的態度」という観念の狭隘性もまた指摘され、「美的無関心性」説も人々の関心を呼ばなくなった。それと入れ替わるように、1980年代になると、カントの「崇高」概念がいわゆる現代思想系の思想家によって取り上げられて注目を浴びたこともあったが、なぜアヴァンギャルドの芸術が「崇高」と呼ばれなくてはならないのか、といった点について説得力ある議論がなされなかったため、崇高論も一時的な流行に終わってしまった感がある。このように、古典中の古典である『判断力批判』は現代の美学理論において古典としての役を果たせないでいる。それには大きく三つの理由がある。

第一に、カントは三批判書の中でもとりわけ『判断力批判』において、しばしば言葉を端折り、十分に意を尽くさずに議論を進めている。そのために、議論の筋道の追いきにくい箇所が散見される。結局のところ多くの美学研究者は、『判断力批判』からいくつかの命題(たとえば、「関心を欠いた適意の対象が美しい」とか、「美しいものの判定は単に目的なき合目的性を根底に有する」など)を断片的に拾い出し、それを現代の美学理論に適用して満足することになる(例えば、無関心性の概念が脱文脈化されることで、それが美的適意のための単なる消極的条件にすぎないことが看過される)。

第二に、『判断力批判』が公刊されるまでの美学史的な背景がわからないと、カントの議論の焦点を見定めることは難しい。カントは『判断力批判』において、暗に明に自らに先立つ美学理論(とりわけ、合理主義的な立場に立つバウムガルテン(1714-62年)および経験論的な立場に立つパーク(1729-97年)の美学理論)を批判しつつ、それとの対照において自らの立場を定式化している。美学史的な背景を理解してこそ、カントの理論の独自性も明らかとなるはずである。

さらに第三に、カントの『判断力批判』を読み進めても、そこで展開されている議論と今日の美学理論との接点がなかなか見えてこない。そのため、カントの理論は博物館に陳列された過去の遺産のような印象を人々に与えることになる。こうした事態をいかに克服し、古典を現代に賦活すると共に、古典の賦活を通して現代の美学理論を賦活するのか、これが本研究開始当初の背景であった。

2. 研究の目的

もしも『判断力批判』が美学への古典となりえない理由が以上の点にあるとするならば、(a)カントの『判断力批判』から単に命題を拾い出すのではなく、むしろそこから美学的主題を拾い上げ、それらを論理的に再構成しつつ、(b)さらに一方で歴史を遡りカントの議論を古代ギリシア以来の美学史の内に位置づけ、(c)他方でまた同時に、カントの議論がその後の美学理論に及ぼした影響や、カントの議論の持つ(あるいは持ちうる)理論的射程について触れる、そうした三重の課題を果たす研究が求められるはずである。『判断力批判』という美学の古典に関しては数多くの研究書・論文が著されているが、上述の観点に基づく研究は洋の東西を問わず存在しない。本研究を遂行することで、私は古典一般を賦活すると同時に、古典を通して現代の美学理論を賦活するためのモデルを構築することを目指した。この二重の意味における賦活の実践が、本研究の中核をなす。

ちなみに、私が大学に在職するのは2023年度までの4年間であるが、この間に私はこの研究を同時に美学の全く新たな入門書として公刊する計画を立てた。古典を現代に賦活する試みは、専門家の要求をも満たす入門書という形をとって公刊されるにふさわしい、と私は確信したからである。

3. 研究の方法

本研究の方法は、上記の目的を果たす新たな入門書の構成と密接にかかわる。

この書は、それぞれある特定の主題を扱う 10 の章からなる。章の構成は『判断力批判』第一部の構成に正確に対応している。そして、各章は先の (a) (b) (c) という三重の課題に応じ、A、B、Cの三部分からなる。

各章のAは、カントの議論をある特定の主題に即して論理的に再構成する。カントの議論は多くの場合三段論法によって構成されているが、カントの息の長い構文がこの構成を見えにくくしているため、さらに途中で(本筋をはるかに超える)長大な脱線部分が挿入されることもあるため、決してわかりやすく書かれてはいない。各章のAにおいて私は、カントの議論を誰もが辿りうるように可能な限り明快な形で呈示することを目指した。ただし、ここで呈示されるのはカントの論述の要約でもなければ、いわゆる定説でもなく、一つの解釈である。

各章のBでは、その章のAにおいて扱った論点ないし概念に関して、時間を遡り、カントの議論の歴史的背景を明らかにする。たしかにカントの『判断力批判』は他に類例のない独自の書物であり、いわば時代から突出しているが、しかしそれにもかかわらず(いや、むしろそうであるがゆえに)時代と密接に結びつき、カントに先立つ議論をさまざまな仕方で反響させている。各章のBはそれぞれが小さな美学史を構成する。

これに対し、各章のCは逆にカントの議論のその後の 20 世紀後半にいたるまでの展開を扱う。

『判断力批判』は近代美学の礎となった書物であり、まさにそのゆえにその後の多くの理論家がカントの議論を参照している。カントの美学理論の影響作用史全般を扱うことは私の能力を超えるため不可能であるが、各章のCでは、私にとってとりわけ重要と思われる論者を取り上げる。したがって、各章のCもまたそれぞれが小さな美学史を構成する。

ここで各章が扱う主題について(特にCに関して)ごく簡単に具体的に触れておきたい。第 1 章「美しいものの分析論 質に即して(第 1-5 節)」では、いわゆる美の無関心性説の再構成を行い、それが対象への実践的無関心と美的関与という二つの(つまり消極的ならびに積極的)契機からなることを示す(したがって「美の無関心性」という表現は誤解を招く)。Cではこの解釈の妥当性をシラー、ショーペンハウアーの議論を通して跡づけると共に、デュシャンの「視覚的無関心」あるいは「無感覚状態」という観念がなおカントの射程のうちにあることを示す。第 2 章「美しいものの分析論 量に即して(第 6-9 節)」のCでは、趣味判断の普遍妥当性を巡るブルデュー、ガーダマーの議論を検討する。美と合目的性の関係を主題とする第 3 章「美しいものの分析論 関係に即して(第 10-17 節)」のCではハイデガーの「なぜ なき とどまり(滞留)」について、趣味判断の範例性を主題とする第 4 章「美しいものの分析論 様相に即して(第 18-22 節)」のCではデリダのパレルゴン、ならびにハーバーマースの言語遂行論について言及する。第 5 章「崇高なものの分析論(第 23-29 節)」では崇高論を扱い、Cではリオタールが最小なものから作動するものとして崇高を捉えていることを明らかにする。第 6 章「美的判断の演繹論(第 30-40 節)」は共通感覚について論じ、Cではアーレントとドゥルーズの共通感覚論を扱う。第 7 章「美しいものへの関心(第 41-42 節)」のCでは、シェリング、ノヴァーリス、そして現代のゲルノート・ベームに即して「自然の暗号文字」論の系譜をたどる。第 8 章「芸術論(その 1)(第 43-48 節)」のCでは、カントの「範例的独創性」の議論の反響をシェリングとメルロ＝ポンティのうちに読み取り、第 9 章「芸術論(その 2)(第 49-53 節)」のCでは、カントの芸術論のゆくえを、一方で「形式主義から唯名論へ」(グリーンバーク、ド・デューヴ)の流れのうちに、他方で「質料的なメタ美学」(ドゥルーズ)のうちに辿る。第 10 章「美的判断力の弁証論(第 55-59 節)」のCでは、美的なものとの生とのかわりを、シラーとランシエールに即して検討する。

4. 研究成果

幸い、計画した入門書は『美学』と題して 2020 年度中に公刊することができた。そこで私は、『美学』を踏まえた上で、『判断力批判』第 1 部「美的判断力の批判」に関して訳と註釈を準備した。2023 年度中にすでに出版社に入稿し、2024 年度中に公刊の予定であり、本研究の研究成果の中核をなすものである。そこで、この訳と註釈の特徴について、ここで触れることにしたい。

『判断力批判』に関してはすでに 7 つの翻訳が公刊されており(2023 年 4 月現在)、その数は部分訳を含むならば 9 つに及ぶ。とりわけ、最近に公刊された宇都宮訳(1994 年刊)、牧野訳(1999 年刊)、熊野訳(2015 年刊)は、現在最も参照されることが多く、翻訳の質はいずれもきわめて高い。仮に私がさらに翻訳を加えるとしても、屋上屋を架す愚は避けなくてはなるまい。本書は『判断力批判』第 1 部の翻訳にすぎないが、次の 2 点において、その存在理由を主張しうると考える。

第 1 の存在理由は、カントの議論の論理構造がわかる翻訳を試みた点にある。これはあまりに当たり前のように見えるが、決してそうではない。というのも、カントの原文それ自体がしばしば論理構造を見えにくくしており、論理構成を文中に〔 〕等を用いて挿入しない限り、文意の通じないところが少なくないからである。本書が呈示する類いの翻訳は、金田千秋による部分訳(1995 年)を除いて、存在しない。

第 2 に、私はカントの本文に対して膨大な量の註釈を加え、それを単独の精読編とした。註釈には、伝統的に、欄外あるいは余白に記される長めの scholia と、行間に記される個々の語に

ついでに glossae がある。『美学』各章の A が scholia に対応するとすれば、本書に収められた訳註は長さからして glossae に相当する。このような glossae を含む『判断力批判』の版本もまた、国内外においてこれまで存在しない。本書の訳註の多くは、文法的な事柄、ならびに個々の術語ないし文の解釈にかかわり、主に原語で『判断力批判』第1部を読む研究者および研究者志望の学生に大いに役立つはずである。Philosophische Bibliothek 新版(2005年)に Giordanetti によって附された註は、カントが『判断力批判』において引用ないし暗示している原典の情報にかかわるものであり、また Guyer による英訳(2000年)に附された註の多くは、カントが『判断力批判』公刊以前に記したノート(Reflexionen)への参照を含むものであり、その点でいずれも本書の註釈とは性質を異にする。

美学はもとより哲学、芸術理論、政治哲学等に多大な影響を与え続けてきた『判断力批判』第1部は、論理構造を明確に示す翻訳篇、詳細な訳註からなる精読篇をとおして、その意義がより明確となり、まさに古典の名に値するものとなるはずである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 Tanehisa Otabe	4. 巻 47
2. 論文標題 The Poietic Circle and the Hermeneutic Circle: A Legacy of Romanticism	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 JTLA	6. 最初と最後の頁 44 58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Tanehisa Otabe	4. 巻 1
2. 論文標題 Dialectic of the Aesthetic Power of Judgment	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 The Kantian Mind (Routledge)	6. 最初と最後の頁 235 ~ 246
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4324/9781003406617-27	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 小田部胤久	4. 巻 2024/01
2. 論文標題 美しいとはどういうことか？ 世界との適合を改めて内から生きる	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 58 64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小田部胤久	4. 巻 30
2. 論文標題 大西克礼とシェリング 「浪漫主義」と「東洋的芸術精神」の邂逅	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 シェリング年報	6. 最初と最後の頁 34-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Tanehisa Otabe	4. 巻 32/1
2. 論文標題 Kakuzo Okakura and Another Enlightenment in Early Twentieth-Century Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Dialogue and Universalism	6. 最初と最後の頁 221-232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tanehisa Otabe	4. 巻 13
2. 論文標題 The Pragmatist Understanding of the Dao: The Art of Living and the Way of Art	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Pragmatism Today	6. 最初と最後の頁 140-149
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Tanehisa Otabe	4. 巻 45
2. 論文標題 The Aesthetic Disinterestedness Reconsidered: Baumgarten, Kant, Schopenhauer, and Duchamp	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JTLA	6. 最初と最後の頁 31-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15083/0002000932	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Tanehisa Otabe	4. 巻 45
2. 論文標題 Conceptions of Folk and Art in the Age of Goethe: Herder, Wolf, Goerres, and Schelling	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JTLA	6. 最初と最後の頁 65-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15083/0002000935	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小田部胤久	4. 巻 39
2. 論文標題 芸術の汎律性について 近代日本における 日常性の美学 の試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 美学芸術学研究	6. 最初と最後の頁 189-233
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15083/0002000987	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小田部胤久	4. 巻 1
2. 論文標題 美的仮象論の成立過程：カントからシラーへ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 フィクションの哲学 (樋笠勝士編)	6. 最初と最後の頁 212-236
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tanehisa Otabe	4. 巻 6
2. 論文標題 The Unconsciousness	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Aesthetics and Phenomenology	6. 最初と最後の頁 95-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/20539320.2019.1672278	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Tanehisa Otabe	4. 巻 6
2. 論文標題 Fine Art as the "Art of Living": Johann Gottfried Herder's Calligone Reconsidered from a Somaesthetic Point of View	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Somaesthetics	6. 最初と最後の頁 25-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5278/ojs.jos.v6i1.5901	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Tanehisa Otabe	4. 巻 45
2. 論文標題 The Significance of the Classics (koten) in Modern Japanese Aesthetics	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JTLA	6. 最初と最後の頁 59-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15083/00079297	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Tanehisa Otabe	4. 巻 29
2. 論文標題 Das Exemplarische und die Originalitaet. Schellings Kunstphilosophie im begriffsgeschichtlichen Kontext	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Athenaeum	6. 最初と最後の頁 95-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.30965/9783657760350_006	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計8件(うち招待講演 7件/うち国際学会 7件)

1. 発表者名 Tanehisa Otabe
2. 発表標題 The Pragmatist Understanding of the Dao: The Art of Living and the Way of Art
3. 学会等名 The Promise of Pragmatist Aesthetics: Looking forward after 30 years (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tanehisa Otabe
2. 発表標題 The Poietic Circle: Reconsidering the "Gift of Nature" and the "Intention" of the Artist in Schelling's Philosophy of Art
3. 学会等名 NASS 7 Schelling and Philosophies of Life, (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tanehisa Otabe
2. 発表標題 Ueber die Anfaenge der Kunst. Zu Schellings Theorie der Bildhauerkunst
3. 学会等名 Schelling Tag 2022 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tanehisa Otabe
2. 発表標題 Die Entdeckung des Volkes und die Entstehung des Kunstbegriffs in der Goethezeit
3. 学会等名 Symposion der Herder-Gesellschaft Japan (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小田部胤久
2. 発表標題 見ることを学ぶ (視賞之道: 歌徳与席勒的芸術愛好論)
3. 学会等名 第6届全国高校美術教育研究生創新學術論壇、中国・南昌 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小田部胤久
2. 発表標題 大西克礼とシェリング
3. 学会等名 日本シェリング協会大会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tanehisa Otabe
2. 発表標題 Schelling in Japan
3. 学会等名 Conference organized by the North American Schelling Society (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tanehisa Otabe
2. 発表標題 Aesthetic Disinterestedness: Kant, Schopenhauer, Heidegger, and Duchamp
3. 学会等名 The George Story Lecture at the Memorial University (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Eva Man (ed.), Tanehisa Otabe (分担執筆)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Amsterdam University Press	5. 総ページ数 296
3. 書名 Comparative Everyday Aesthetics: East-West Studies in Cotemporary Living	

1. 著者名 小田部 胤久	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 480
3. 書名 美学	

1. 著者名 小田部 胤久、宮下 規久朗	4. 発行年 2024年
2. 出版社 放送大学教材	5. 総ページ数 300
3. 書名 西洋の美学・美術史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>google scholar https://scholar.google.co.jp/citations?user=mSVycEMAAA&hl=en research gate https://www.researchgate.net/profile/Tanehisa-Otobe ResearchGate https://www.researchgate.net/profile/Tanehisa-Otobe/research/academia.edu https://u-tokyo.academia.edu/</p>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------